

解離とトラウマ

京都大学大学院教育学研究科 解離トラウマ研究会

西岡 真由美

I. 講演会開催の経緯

本講演会は、京都大学教育研究振興財団助成金事業「力動的理解に基づく心理療法の効果およびプロセス研究」を受け、京都大学解離トラウマ研究会の企画により開催されたものである。講演を引き受けて下さった柴山雅俊先生は、東京女子大学で教授として教育に携わりながら、国際トラウマ解離研究学会日本支部解離研究会の代表をつとめておられる。当研究会の顧問である岡野憲一郎先生とともに、日本の解離性障害研究の第一人者でいらっしゃる先生である。

講演会には、大学院生 21 名、当研究会の学外メンバー、当教室 OB・OG、京都大学病院精神科医局などの関係者 25 名の合計 46 名が参加した。講演会開催に際して全面的にサポートして下さった岡野先生はじめ、関係各位の皆様がこの場を借りて深く感謝申し上げます。

II. 講演内容

1) 解離の症候学

「学校でノートをとっている時、左斜め後に自分が立っている感じがする。自分を見ているもう一人の自分を感じる」という表現に表されるように、解離においては、まず「私」の二重化が起こる。空間的変容において「私」は、現実世界の中の自己（「存在者としての私」と、そこから離れて眼差しを向ける自己（「眼差しとしての私」）に分離する。「眼差しとしての私」は、「存在者としての私」を他人事のように眺め、ときに体外離脱に至ることがある。周辺世界は遠ざかり、現実感が希薄となる。こうした体験を離隔 *detachment* という。「存在者としての私」は、現実世界に縛り付けられ、周囲が迫ってくるように感じる。周囲の眼差しや刺激に敏感で、怯えや不安が強く、思考やイメージが統制を欠いてまどまりなく湧き上がる。こうした体験を過敏 *oversensitivity* という。

時間的変容とは、解離性健忘や遁走、人格交代など、他者に認知される自己状態が、時間的不連続性をもって変化することである。時間的変容は、切断された「現実空間」と「隠蔽空間」という 2 つの場所の交代劇である。解離の病像は、空間的変容から時間的変容へと至る連続線上にある。空間的変容は、現在の意識の場から「もう 1 つの現実の場所」である隠蔽空間へと切断される。切断された空間的変容の「私」は隠蔽空間において居場所を得て、次第に人格としての同一性と役割を精緻化していく。隠蔽空間は現実空間から切断された空間であるが、そこでは過去の感情や感覚、思考が現在も生きて、現在

の「私」に様々な影響を与えている。

2) 解離とトラウマ

トラウマを知ることは治療にとって重要である。現在トラウマは広い意味で使われているが、解離には、解離に比較的特有のトラウマ体験があるのではないだろうか。トラウマには、誰にとっても認識できる客観的トラウマと、個人にとってさまざまな主観的トラウマがある。またトラウマは加害者側と被害者側のどちらの要素によっても構成されるものである。ここでは、患者にとっての主観的トラウマの観点から捉えてみたい。

解離に特有なトラウマを知る 2 つの経路として、「意識主体によるトラウマ認識」と「空間的変容によるトラウマ認識」がある。前者は、患者の意識主体がトラウマを認識する経路であり、通常成長するに従って、トラウマの全体を認識できるようになる。後者は、空間的変容に刻まれた痕跡からトラウマを把握する経路であり、意識や言語の対象とすることが困難である。前者において、トラウマ体験は単なる過去の出来事ではなく、現在から振り返って認識する意識主体との関係によって変化する。幼少期においては、十分に把握することができなかつたトラウマの意味や他者の意図を、小学校半ばから高学年になると把握できるようになる。そのため、患者はトラウマの衝撃を再度受けることになる（前思春期の再トラウマ）。それ以来患者は心のなかに、現実の他者に表現できず、彼らと交流できない領域を抱え込むことになる。物心ついた頃から、患者は現実の世界には「自分の居場所がない」ことに漠然と気づいており、空想の世界へと没入しがちである。こうした状況の中で、次第に空間的変容が現れる。一方、後者の「空間的変容からみたトラウマ認識」においては、自らの空間的変容（さらには時間的変容）を理解することで、意識主体によるトラウマ認識が促される。

空間的変容に含まれる二軸として、①近接化と遠隔化、②現実（世界）の束縛と現実（世界）からの遊離があげられる。①は、「私」にとって脅威の対象が近くに迫ってくるか、遠ざかるかといった横軸であり、②は、「私」の視点が「いま・ここ」の現実には縛られているか、そこから遊離するかといった縦軸である。解離では、縦軸が特徴的である。

解離性トラウマに特徴的なこととして、予期できない他者の怒りや虐待のため自由を奪われ、身動きが取れず、虐待者の所有物のように行動を強要されるということがある。特に性的虐待の場合、恥・罪・穢れ、さらには共犯意識や罪悪感が押し込まれ、植え付けられる。こうしたなかで、現実の苦痛を体験する犠牲者と、なんとか生き延びようとする生存者に切り離される。犠牲者は現実の「いま・ここ」に縛り付けられ、相手に服従する。生存者は、逃げ、隠れるために「いま・ここ」から遊離し、向こう側へと向かう。空間的変容の「私」は、あくまで自己の連続性は保たれており、不安や恐怖、知覚の変容などを特徴とし、現実空間に足場を置いている。犠牲者と生存者は、それぞれが情動、感情、思考、記憶、意志、役割など、人格としてのまとまりの萌芽を持っており、隠蔽空間に位置づけられる。

3) 迫害者の起源

Ferenczi や Howell, E. は、子どもが大人から虐待を受けた場合、攻撃者と自らを同一化させることを説いた。しかし、虐待者をそのまま取り入れて、それが交代人格になることはきわめて稀であるし、そのような捉え方は治療的ではない。もちろん虐待者を起源とする人格像が、表象空間に（ときに外空間に）黒い人影などとして登場することはある。しかしそれは記憶表象に由来し、フラッシュバックのよ

うなものであり、人格交代との本質的関連はないように思われる。同一化は虐待者よりも、憧れや共感の対象、恐怖の犠牲者（怯える者）に対する共鳴から生じる。虐待者の属性の取り入れにはどこか共鳴するところがないといけませんが、被害者は虐待者に共鳴しがたいという点で、同一化は困難である。

隠蔽空間において、「存在者としての私」と「眼差しとしての私」は犠牲者と生存者へと切り替わり、そこから様々な交代人格が形成されていく。これらは両極性の構造を持つ。犠牲者は、かつて自分が圧倒された外傷時の知覚、体感、感情の実感をひとりで抱え込んでいる。一方、生存者は、虐待の生の記憶を犠牲者任せにして、自らはそれを他人事としている。外傷の実感を持たない代わりに、そのとき表出できなかった感情を抱え込んでいることもある。犠牲者は、困難な状況のたびに「身代わり」として自らを捧げることで、人格全体を救う「身代わり天使(scapegoat angel)」であり、自分ひとりで虐待の実感や記憶を抱え込んでいる救済者である。その一方で自分の運命を呪い、本人や主人格に対して恨みや怒りの感情を抱くこともある。攻撃性を実際の虐待者に向けることは少ない。生存者は生存への強い意志や、犠牲者を切り離して生き延びたことに対する負い目を抱いている。そのため主人格が窮地に追い詰められると、突如現れてまるで鎧や盾のように「身代わり」となって患者を守る。このような守護的働きをする交代人格を「守護天使(guardian angel)」と呼び、周囲に対して過剰に攻撃的になることもある。その一方で本人や主人格に対して、「情けない奴」「死んでしまえ」などと軽蔑し、自傷行為など迫害的な態度を示すことがある。このように迫害者と救済者は反転可能である。迫害者の背後には、これまで患者を保護・救済してきた救済者がいることを忘れてはならない。迫害者と救済者が表裏の関係にあることに気付くことで、人格同士の交流はさらに促される。攻撃的な交代人格はともに生存者に由来しており、「生き延びよう」とする人格であるがゆえ彼らと交流することは治療的である。

4) 解離症の治療論

解離症の治療には4つの段階がある。第1段階では、安全と安心の確立を行い、第2段階では交代部分との交流を行う。第3段階は外傷記憶の物語化を通して、体験の全体を知る段階であり、第4段階では日常生活の回復を行う。治療の際には、まず、混乱している患者を了解・受容し、症候や病態構造、回復への道について説明する。そして、安心できる環境において、患者自身が断片化した「私たち」を結ぶことができるようにする。治療者はあくまでそのための媒介者であり、治療は患者が主体となって行う。

諸人格は統合による消滅を恐れ、患者はトラウマ記憶を想起することを恐れている。交代人格を近づけないようにするのではなく、彼らの存在を受容・肯定し、これまでの身代わりの役割に敬意を払い、患者の心の全体性の理解と回復のために、彼らが不可欠であることを伝える。実際の治療の場では、さしあたって生存者と交流し、のちに犠牲者と接触する。交代人格と出会うための場所を表象空間につくる。そこは、「いま・ここ」から少し距離をとった、能動的に作り出した想像の場所である。交代しない程度の距離が必要である。

生存者との交流は、トラウマにまつわる感情や思い、記憶に気づかせてくれる。これまでの役割に感謝の意を伝え、労い、生存者の生き抜こうとするエネルギーを自らに流し込む。犠牲者は、安心できると感じられると、しだいに姿を見せるようになる。犠牲者に対しても、これまでの役割に感謝の意を伝え、労う。彼らの気持ちを汲み、優しく包み込む場所を与える。犠牲者との交流により、さらにトラウ

マ記憶が想起される。ただし想起よりも、交流を第一に考えるべきである。

治療が回復のための場所となるために、治療者と患者間の信頼関係を築く。「われわれ」は、交代人格の「身代わり」性を理解し、彼らに共感し、敬意を抱く。交代人格の同一性は、彼らに向けられる眼差しによって大きく影響を受ける。そのなかで、隠蔽空間の中にシステム全体に目を配る交代者が浮かび上がることがある。それと同時に、現実世界においても意識の全体に眼差しを向ける「私」が立ち上がる。そして、それぞれの「私」をつないでいく。「私」は、慎重に交代人格に呼びかけ、彼らを迎え入れていく。そこにおいて治療者は、さしあたって患者に身をもって気づかせる身代わりの機能を果たすが、しだいに他者（交代人格）との交流を支える「われわれ」という場所として機能する。「われわれ」が作り出す共同主観の場所は、「他者」と交流するために必要な場所である。ここでいう場所とは、人の存在を支える土台であるとともに、他者との交流の前提でもある。患者は、内的他者＝交代人格と交流するなかで、自らの全体性と時間の流れを獲得する〈私〉となり、そして外的他者＝現実の他者に〈私〉を表現し、相互に交流するようになる。

Ⅲ. 考察と感想

これまでの長年にわたる解離性障害を持つ方々との出会いに裏打ちされた、柴山先生の理論と治療論は、身に迫ってくるようなものを感じると同時に、解離性障害を持つ方々への柔らかく温かな眼差しを感じ、理論的にも、臨床的にも大変学ぶことの多い講演会であった。柴山先生は、とても自由で（このように表現することは大変恐縮なのだが）お茶目な方で、解離性障害を持つ方々にとって、怯えることなく安心して会うことのできる先生でいらっしやるのだろうと想像した。

講演をお聞きするまでは、解離性障害の症状は、自身のなかではばらばらに存在していたが、まず空間的変容が現れて時間的変容が起こってくるのが症候の詳しい記述とともに説明され、つながりのあるものであることが理解された。また、解離に特有なトラウマとその体験のされ方について説明して下さり、なぜ解離という現象が生じるのかの理解につながった。解離性障害でしばしば問題となる攻撃的な人格については、犠牲者と生存者、救済者と迫害者という観点から説明され、単純に迫害している者との同一化によって生じているのではないという考えが興味深かった。最後の解離症の治療論において、ご自身の豊かな経験を踏まえて治療の原則や実際の方法、治療者の心構えをお話くださり、臨床場面における大きな道しるべを示していただいたように思った。